



埼玉県地域共同リポジトリSUCRAへの誘い —大学が大学でありつづけるために—

埼玉大学図書館 村田 輝

朝日新聞社の発行する「大学ランキング」に、2010年版から「大学図書館ランキング」などと並んで「機関リポジトリランキング」が掲載されるようになった。図書館が設置されていない大学が大学として認めてもらえないのと同じように、機関リポジトリを持たない大学が世間から大学として認めてもらえなくなる時代がすぐそこにまで来ているのかもしれない。

なぜ大学には機関リポジトリが必要なのだろうか。それは大学が教育機関であるのと同時に研究機関でもあるからである。教育を第一の目的に掲げている大学であったとしても、教員がたゆまぬ研究を行わなければ、大学における高度な教育を支えていくことはできない。その研究の成果を、学生に伝えるのみではなく、論文などの研究成果物として記録・蓄積し、広く社会に発信していくことが大学に課せられている義務である。

従来は学術雑誌や大学紀要などが、研究成果物の蓄積と発信の役割を果たしていた。しかし誤解をおそれずにいえば、これらのメディアはもう時代遅れになりつつある。学術雑誌の電子化は進んでいるが、外国雑誌を中心に価格の高騰が進み、早晚一部の金持ち大学を除いて購入できなくなるに違いない。大学紀要の多くは、図書館の書庫の片隅にひっそりと埋もれているばかりである。その結果、大学の教育研究活動の多くは、一般の人々の目に触れることはめったになく、予算を増やして大学を社会で支えていこうなどという声は大学の外のどこからも聞こえてこない。

ここで機関リポジトリの出番である。世の中はインターネットの時代であり、それも Google で上位にヒットしなければ、その情報は存在しないに等しい。いくら綺麗に飾り立てたホームページをつくっても、内輪の関係者がマニアでもなければ見に来てくれる確率は極めて低いと思った方がよいのである。それよりも、機関リポジトリに載せてネットワーク上での流通の最大化を図ることが得策である。機関リポジトリに情報を搭載することの最大のメリットは、OAI-PMH と呼ばれるスタンダードな学術情報流通フォーマットに乗って、情報が世界中を駆け巡る点にある。機関リポジトリの文献は、Google などの検索

SALA 通信 No.17 (2009.5.21 発行)

エンジンからヒットするのはもちろん、国立情報学研究所の **JAIR**O やミシガン大学の **OAIster** などの検索の対象となり、研究成果物の視認性は格段に高まる。光の当たらない書庫の最奥で、埃をかぶっていた研究成果が、一気に全世界の注目の的となる可能性もあるのである。

しかし、機関リポジトリを立ち上げるといってもどうしたらよいのだろう。お金もかかるし、ノウハウが必要である。

ところが、幸福なことに、埼玉県においては、このような心配は全くいらぬ。埼玉県大学・短期大学図書館協議会の運営する埼玉県地域共同リポジトリ **SUCRA**(さくら: **Saitama United Cyber Repository of Academic Resources**)に参加するだけである。サーバは無償で提供されており、必要な知識や技術も **SALA** のメンバーから簡単に手に入れることができる。

埼玉県には多くの大学がある。すべての大学が発展しつづけてほしいと願う。機関リポジトリは今や大学が大学でありつづけるための必要条件である。埼玉県のすべての大学が機関リポジトリを持つ日が来ることを期待したい。